
神奈川大学での日本語の授業とその問題点

秋山 洋子（神奈川大学非常勤講師）

神奈川大学での日本語は、現在「日本語Ⅰ」から「日本語Ⅳ」まで4コマ各2単位の授業がおこなわれ、2人の非常勤講師が担当している。このほかに、留学生対象の講義「日本事情」も開講されている。日本語授業の対象は、短大を含むすべての学科にわたっている。その具体的内容と問題点について、知っている範囲で述べてみよう。

大学での語学の学習を考えると、まず最初に目的、つぎに時間と内容が問題になる。日本人大学生の外国語学習とはちがひ、留学生の場合には、目的は明瞭である。日本人の学生といっしょに授業を受け、ついていけるだけの日本語力を身につ

けることだ。ほんとうなら、この目的にそうだけの日本語力を持った学生だけに入学許可をすれば問題はない。しかし、留学生の日本語学習は日本語学校における1～2年間であり、いかに努力しようとも、日本に生まれ育った学生と同じ語学力を数年で身につけることは不可能である。入学者の選抜においては、大学側もどこかで妥協せざるを得ない。そのうえ、日本の大学の偏差値による輪切りには、留学希望者もまた敏感であるから、留学生もだいたい日本語能力の高い順に偏差値の高い大学からわりふられてゆく。神奈川大のような私立中堅校に来る学生は、日本語学校卒業時の

成績を5段階評価でいえば3の上から4といったところだろう。(同時に日本にきた就学生の中で卒業まで落ちこぼれず残る者は半数程度だが)。

こういう学生を受入れて、大学の授業についていけるようにするためには、何を補わなければならないか。一般に語学の能力は、読む、書く、聞く、話すの4技能にわけられる。この4技能は互いに関連しており、同時に発達することが望ましいのはもちろんである。神奈川大学の授業でも、最初のわりふりでは4コマの授業にそれぞれを割振ったのだが、その後は、講師がかなり自由に内容をきめるようになってきた。

私はとりあえず大学の授業についていくために必要な能力は、書くことと聞くことではないかと思っている。読む能力はもちろん重要だが、漢字圏の学生の読解力はかなり高く、中国の学生の漢字の知識は最近の日本人学生の比ではない。幸いなことに専門的な文献であるほど漢語の占める率の高いのが日本語の特徴であるから、大学の教科書程度は何とか読みこなしているようだ。授業では、読解は他の講師が重点的に取上げておられることもあって、このところ私の授業ではあまりやっていない。

また、話す能力については、ほとんどの学生が日常生活に必要な会話力は2年間の日本生活で身につけており、それ以上の討論やスピーチ能力は、日本の大学の教育システムでは、幸か不幸か必須のものではない。必要だとしても専門課程のゼミの段階になってからである。そういうわけで、大学に入学した留学生にとって、まず必要なのは授業を聞いて理解する能力であり、レポートや論文を書く能力である。

☆作文教育について

先に述べたような観点から、私の担当する日本語授業では、一貫して作文を中心のひとつにおいてきた。この授業を具体的に紹介しながら、作文教育の問題点を考えてみたい。

現在作文の授業は週一回、授業には凡人社の『実践にほんごの作文』という教科書を使っている。この教科書は、大学での作文教育のために作られた数少ないもののひとつで、10章からなり、「事実を述べる」「意見を述べる」「引用する」「要約する」

といった文章の機能別に章だてされている。各章は例文、基本表現、練習問題で構成されており、このほか、巻頭に原稿用紙の使い方や、助詞「は」と「が」、自動詞と他動詞など、外国人にとって難しいポイントのまとめと問題がついている。

授業に教科書を使うか、教師が自主教材を作るかは難しい問題で、既成の教科書を使う場合どうしても欠点が気になってくるものだが、自主教材の場合は教師の努力と能力が要求されるのは当然としても、毎回コピーで与えたものはきちんとした形で保存されにくく、学生の頭から消えると同時に教材そのものも散逸してしまう可能性が高い。その点、1冊にまとまっていれば、のちのち論文を書くときなどにも基本表現を参照することができる。現在使っている教科書にも不満はあるが、とりあえず基本的な流れではこれに依拠することにしている。大学レベルでの日本語教育は、現在必要に迫られて実践・理論ともにどんどん進んでいるので、作文教育の教科書も種類がふえてくることを期待している。

授業では、必ず毎回書く作業をさせる。教科書の課題にそって、特定の表現を使った短文、数行で答えられる設問への回答もあるが、400字程度のまとまった文章を書くことが多い。文章は必ず添削し、次回に返却する。本当はこれをもう一度清書させたいのだが、いまのところ清書するように勧めはするが強制はしていない。短い課題の場合には、前に出てきて板書させ、みんなで批評することもあるが、授業に変化が出るためか、案外よろこんでやっている。また、提出された作文の中から誤用例を集めてプリントし、みんなで正解を考えるのも学生にとっておもしろいようだ。

学生の作文の問題点はどこにあるだろうか。単純な問題からあげて行くと、まず文体の混乱がある。一般に日本語の初歩では「ていねい体(ます)」の話し言葉を教え、それにそって「私の一日」とか、「私の家族」といった作文を書かせるところから作文指導がはじまる。いわば日本の小学校の段階である。したがって、最初の授業で自己紹介の作文を書かせると、ほとんどの学生がていねい体を使っている。これを「普通体(だ、である)」を使って大学生らしい文章を書くようにさせるのが最初の

指導になる。文体の問題はかなり機械的に処理できるので、たいていの学生はすぐ習得するが、中にはいつまでも混乱して、形容詞の終止形に「だ」をつけたりするものもある。

問題がいちばん多く、いつまでたっても難しいのは助詞である。とりわけ、中国の学生にとっては、母国語にない助詞という概念自体を会得するまでにかなりの努力が必要だったことだろう。主格の「は」と「が」、場所をあらわす「で」「に」「を」の使い分けなど、ある程度まとめて説明し、それぞれの作文ではそのたびごとに訂正しているが、なかなか完璧にはならない。その点韓国の学生は、母語に助詞があるので、それほど苦労はしないようだ。

その他、接続詞、動詞のアスペクト（「た」と「ている」など）、「あれ」「それ」「これ」（中国語では遠称と近称しかない）の使い分けなどがよくひっかかる点だ。

語彙についてはあまり問題がないが、ときおり母語にあって日本語にない語彙が混入したり、中国語の略字が使われていたりする。もうひとつ意外な落とし穴は、作文の中で立派に使いこなしている語彙を読ませてみると読めないことだ。読めないということは、耳で聞いてもわからないということである。これは大きな問題なのだが、実際には毎回各自に朗読させる時間の余裕はとてもない。学期末などに、作文をもとにスピーチをすることなども試みたいと思っている。

細かいことをあげればきりがないが、じつは一番問題なのは、文脈の通らない文章である。日本語中級までに習得する日本語の文型は、非常に単純なものである。しかし、自由に作文するとすると、言いたい内容は大学生のレベルだから、そのあいだのギャップが埋められない。文章が長くなるにつれて、最初に出てきた主語と結びの述語がずれてしまう。あるいは、自動詞と他動詞が逆になる。要するに、日本語の文章として成立しないのだ。

この種の混乱は、日本人でも話言葉の場合などはよくおこる。わかっているつい間違えるのはだれにもあることだが、問題なのは日本語の基本構造を把握しきれていない場合だ。授業をしてみると、毎年何人かはこういう基本的な問題を持った

学生が出てくる。こういう学生のなかには、日本語学校がつぶれて途中までしか授業が受けられなかったという者もいるが、難しい語彙や慣用表現などはたくさん知っていて、日本語能力にけっこう自信を持っている者もいる。逆に、語彙が少なく小学生のような文を書いているも、文脈はきちんと通っている者もいる。後者の場合はこれからどんどん語彙や表現を増やしていくことができるが、前者の場合は難しい。これは、現在大学入学には必須となっている日本語能力検定の偏りと関係がある。きちんとした日本語の構文を身に付けるべき日本語学校の第二年次が、選択式の模擬試験に費やされていることと無関係ではない。現在、学生のこのような問題には個別の添削で対応することしかできていないのだが、実際には根本的な問題がある学生は指摘された問題点を十分把握しきれない。逆に、基本的な問題のない学生は、指摘された細かい問題点に敏感に反応する。したがって、一年間の指導でそれぞれに最初の段階よりは向上したとしても、学生間にあったギャップを埋めるところまではいかないのが現状である。

☆語彙をふやす

さきに、学生に要求されるのは書く能力と聞く能力だと述べた。しかし、現在担当している授業では、いわゆる聴解はやっていない。例えばテープ機材を使って聴解そのものの授業をするのも一つの方法ではあるが、学生にとっては実際のすべての授業が聴解の現場となっているわけだから、むしろそれを助けるためには基本表現や語彙を増やすことが必要なのではないかと考えて、このところそういう授業をしている。昨年と一昨年は、『日本語新聞の読み方』というテキストを使って語彙を補いながら、実際の新聞を読んだ。このテキストには、名詞と動詞を組合わせた基本表現の一覧があるので、これを毎回1ページずつ与えて次回に漢字、読み、助詞の穴埋めなどを組合わせた小テストをおこなった。これは単語を音として覚えることと、間違いやすい助詞を動詞と組合わせて覚えてしまうとういう意味では効果があったとおもう。

今年度は、他の授業で新聞が取上げられているので、趣向を変えて『日本語表現便利帳』（専門教

育出版社)をテキストにしてみた。これは、衣、食、住、人の性格や外見、気候、組織など10項目にわたってさまざまな表現が集められ、問題が添えられたユニークなテキストである。内容はなかなか面白いのだが、集められた表現があまりに多く、最初のうちでいねいにやっていたのでちっとも進まない。途中で方針を変えて、練習問題を重点的にやることにしたが、このテキストはむしろ作文の副教材としたほうがよかったかもしれない。授業の最初には、『外国人のための助詞』(武蔵野書院)から、練習問題を1ページずつやっている。このような短時間の練習のくり返しは、気分転換にもなり、積重ねることでそれなりの効果もあるようだ。

☆授業時間とカリキュラム

現在神奈川大では、日本語の授業は4コマである。(中国語学科の学生にはあと一コマ必修となっているが、現在のところ開講されていない)。じつは日本語が開講された最初の2年間は、これが倍の8コマあった。なんとか留学生の日本語能力をあげようという配慮だったが、単位数が2コマで2単位と他の語学の半分だったこともあり、学生の負担が大きすぎるので現在の4コマになった。授業をする立場としては、作文については時間がたっぷりあるのはありがたかったが、もうひとつの授業は2コマ続けて飽きさせないように授業を進めるのはなかなか難しかった。2年目は授業の後半を自由課題とし、学生に自分で学習計画をたてさせて、速読や問題集をやらせてみたが、結局ほとんどが同じ問題集をやるような結果になった。2年ずつの経験からみて、2倍の授業時間だからといって2倍の効果があつたとはいえないようだ。

その理由の一つは、語学の学習には段階があるということだ。短期集中が大きな効果を発揮するのは初級から中級にかけて、留学生の場合でいえば日本語学校の2年間である。この期間に、基本的な語彙と文法構造を身に付けてしまうと、あとは無限にある語彙や表現を徐々に拡大していく段階になる。大学にはいった留学生は、この段階にさしかかり、大学生活のすべてがかれらの日本語習得の現場となるわけだから、日本語教育はこの段階ではむしろ脇役にまわり、かれらの日本語習

得を効果的にサポートする役割をはたすべきだろう。そのためには、日本語の授業時間が多すぎて学生に負担になるようでは逆効果である。

短期集中の時期がすぎたということは、逆にいえば、気の長いフォローが必要だということだ。その点では、日本語の単位を1年生で全部とってしまうのは、必ずしもいいとはいえない。現在はできれば1年生で全部とり、残した者が2年というふうになっているが、他の授業で出てきた日本語の問題を持って来る場として、2年目にも日本語の授業があつたほうがいいのではないだろうか。教師のほうも、2年間にわたって同じ学生とつきあうと、その学生の問題点もよく見えて、適切な指導もしやすくなる。

なお、中国語学科の2単位については、例えば中国語和訳のような授業を設定して、中国語学科の日本人学生や中国語学科以外の中国人学生も自由選択できるようにしたらおもしろいのではないかとおもうが、どうだろうか。

時間よりもっとたいせつなのはカリキュラムである。じつは神奈川大学の日本語授業で最大の問題は、日本語授業全体の方向をきちんと決めるシステムができていないことである。現在日本語の授業は、非常勤講師2人が2コマずつ教えているが、授業内容はそれぞれが完全に任されている。という信頼されているようだが、要するに全体責任を負うところが存在しないのだ。講師同士も出講日が違うので、顔をあわせることがない。日本語用の資料を置く場などもないので、非常勤講師控え室の書棚の一部を利用している状態である。外国語学部には日本語教師養成の副専攻課程があり、そこには専任の先生もおられるようだが、これも留学生の日本語教育とはまったく関係がない。

今後、留学生の受入れを続け、ふやしていくのであれば、日本語教育も先を見通したシステムが必要になってくる。この4年間の試行錯誤を今後の礎石として役立てるためにも、経験をきちんと把握して集約するところがなくてはならない。日本語の授業、日本事情の授業、留学生のカウンセリングなど、全体を見渡して適切な指示のできる責任体制が必要になってくるだろう。